狩りの夜、狩人は何を想う

naapatbx

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

「青ざめた血」を求めよ。狩りを全うするために

・Ｂｌｏｏｄｂｏｒｎｅの本編（ほぼ）そのまんまです。一部、小説向けに設定や会話を変更しております。何か言われればすぐに消します。

・週３くらいのペースで交し・・・更新予定です。最低でも週１で更新します。

・小説処女作です。いじめないでください。餌を与えないでください。血質３１．５％形状変化スタミナマイナスをください。

・あらすじって、他に何を書けばいいんですかね

目次

第０話　血を受け入れる ―――― 1
第１話　「青ざめた血」を求めよ。狩りを全うするために ―――― 5
第２話　狩人の夢 ―――― 9
第３話　獣狩りの夜が始まる ―――― 24
第４話　２人の助言者 ―――― 33
第５話　学習と目標 ―――― 43

第0話　血を受け入れる

「ほう・・・青ざめた血ねぇ・・・」

暗い病室の中に、車椅子の老人の声が響く。

「確かに、君は正しく、そして幸運だ。まさにヤーナムの血の医療、その秘密だけが・・・君を導くだろう」

老人の言葉に血が騒ぐ。自分の目的が達成されることへの喜びか、それとも・・・

「・・・だが、よそ者に語るべき法もない。だから君、まずは我ら、ヤーナムの血を受け入れたまえよ・・・」

その言葉に深く頷く。ここまで来て、手ぶらで帰れる筈もない。

「さぁ、契約書を・・・」

契約書に必要事項を記入していく。とは言っても、書くことなど、名前と性別くらいなものだが。

「よろしい、これで契約は完了だ。それでは、輸血をはじめようか・・・」

そこまで聞き、診療台の上に仰向けになる。もう、後には戻れないのだ。

「なあに、なにも心配することはない。何があっても・・・悪い夢のようなものさね・・・」
麻酔が効いてきたのか、意識が薄れていく。そしてそのまま、眠りにつくのであった・・・

（・・・えっ、ここどこ?）
気がつくと、暗い部屋の中、何か台のようなものの上に仰向けになっていた。
まず見えたものは見知らぬ天上。足先のほうに目を向けると、小瓶などが入った棚が見えた。恐らくは医療関係だろう。そして首を傾け横を向くと、そこには大きな血溜りのようなものが見える。
（血?・・・というか、何か出てきたぞおい）
その血溜りの中から、ざぶざぶと音を立てながら、４足歩行の獣のような何かが出てくる。体毛は血によって紅く染まり、体の肉は少なく、あちこちから肉や骨がむき出しになっているように見える。
（やばくない、これ。やばくない?）
動こうとするも、体が動かない。首はかろうじて動くのだが、他は全く動かず、口を開くことも、匂いを嗅ぐこともできない。恐らく、麻酔のような何かが効いているのだろう。

そんなことを考えている間に、獣がこちらへと歩み寄ってくる。歩くたびに聞こえる、血の滴る音が妙に生生しい。そして、その獣が眼前にまで迫ったとき、こちらに手を差し伸べてきた。

次の瞬間、獣が突然燃え出した。眼前で炎に包まれた獣。しかし、こちらは別段熱くもなく、他の場所に燃え広がるということもなく、すぐに炎は消えた。そして、獣の姿もなくなっていた。

(ど、どうなっているんだ・・・)

短い間に様々な出来事が起こりすぎて、自分の中で整理しきれない。

何とか状況を整理しようとしていると、自分の足元、その付近から、何かが這い寄ってくる気配がする。そして、その気配のするほうに視線を向ける。

(・・・えっ、何?これ)

ソレは白い小人のような姿をしているが、よく見ると肉付きは悪く、顔の形も不自然に歪んでいると、何とも形容しがたい姿をしている。

一体ソレが何なのかと考える間もなく、ソレは自分の体を這い登ってきた。しかも気がつけば、自分の鳩尾の辺りから、さらに1体、這い上がってきた。

(待て、待て待て待て待て待て・・・!)

気がつけば、足元からさらに1体、もう1体と次第に数を増やしていく。そしてソレ

らが自分の体中に纏わりついてくる。
そして、顔まで埋め尽くされそうになったとき、自分の意識が薄れていくのを感じた。

そして、意識が完全に消える間際、女性の声が聞こえた気がした。
「ああ、狩人様を見つけたのですね」

第1話　「青ざめた血」を求めよ。狩りを全うするために

「う～ん、白いナニかが・・・ハッ!?」

意識が覚醒する。先までのこともあり、体を起こし、周りを確認する。

「どこだ、ここ・・・って、さっきの夢の場所か?」

見知らぬ天上、小瓶の入った棚。そこまでは確認できたが、血溜りや、形容しがたい白い小人のようなものはどこにも見当たらない。

「どうなっているんだ・・・まだ寝ぼけているのか?」

そこまで言って、自分が体を起こせたことに気がつく。麻酔のような何かはかかっていないようだ。そして、台の上から降りる。

「自分で体を動かすこともできる・・・明晰夢(めいせきむ)にしては、俺が望んだような場所には見えないし・・・」

そして、歩きながら周りをぐるっと見渡す。先ほどまで横たわっていたのは、診療台のようだ。部屋には扉が2つあり、片方はカギがかかっているようで、もう片方には明かりが点いたランタンが壁にかかっていた。共通して言えることといえば、どちらから

も、人の気配がしないようだ。辺りからは薬品の鼻をつくような臭いが漂っている。
「んー、こんなところに入り込みたい、みたいな自虐欲求でもあったのかな・・・それとも、病院に行く予定でもあったっけか？」
　そこまで言い、眠る前のことを思い出す。いや、正確には思い出そうとした。
「記憶が・・・ない？」
　そう、これが夢だとしても、眠る前に考えていたことどころか、自分のことさえ思い出せないのだ。
「え・・・っと、そういう設定の夢だったり・・・？」
　自分にそう言い聞かせるも、さすがに無理があると思った。自分をつねった感覚はまだしも、周りから漂う薬品の臭いや、床から聞こえる木材が軋んだ音、肌に擦れる衣服の感覚など、夢にしてはあまりにもリアルすぎるのだ。
「寝ぼけてるわけではなさそうだし、もしかして、誰かに攫われでもしたのか？」
　様々な不安や考えが頭をよぎるが、両の頬を平手で叩き、それらを一旦、頭の中から全て追い出す。
「考えていても仕方がないし、まずは行動だな・・・って、なんだ？この紙」

目を向けた先、そこには、走り書きが書かれたメモ用紙が置いてあった。しかも目立つように、光り輝く硬貨も添えられて。そしてそこには、自筆の文字でこう書かれていた。

「青ざめた血」を求めよ。狩りを全うするために　　～ヤクト～

メモを見て、一旦落ち着いて考え直し、出た結論はこうだった。

（・・・誰だ、ヤクト）

悲しいことに、彼は自分の名前さえ記憶になかった。故に、これが自筆の走り書きだとも分からなかった。

結果、このメモが自分の走り書きだと気づくのはかなり後半のことになるのだが、それはまた別の話。

「えっと・・・ともかく、この硬貨で『青ざめた血』とやらを買いに行けばいいのか？」

自分でも無理があるとは思ったが、このメモ以外に手がかりになりそうなものが他にはなく、自分の思考能力ではここが限界だった。

「よし、とにかく『青ざめた血』とやらを探すか」

そう言うと、メモ用紙と硬貨をポケットに突っ込み、カギがかかっていないほうの扉に手を掛けた。

「なんかいる・・・」

扉の奥、階段を降りた先、診療台がいくつか置かれた部屋の中央辺りに、夢で見たような4足歩行の獣がいる。

夢で見た獣との違いとしては、毛は黒く血で塗れておらず、よく見ると何かを貪っているように見える。

現在、部屋に入ったところにある診療台に隠れながら部屋の中を見渡しているのだが、奥に続く通路に行くには、どうしても獣に気づかれてしまいそうなのだ。

「どうすんだよ、今こっちは武器になりそうなものなんてないぞ・・・」

頭が回る者であれば、近くにある瓶や木材の破片など、手ごろなものを投げて注意を引いて、その間に走り抜けるなどといった考えも出たであろう。しかし悲しきかな、彼は産まれついての脳筋思考であった。

「やるしかない・・・よな」

そう決心し、彼は果敢にも獣に挑む。

第2話　狩人の夢

「う～ん、あと5秒・・・ん?」

見知らぬ場所で意識が覚醒する。先ほどまでの室内とは違い、石と草の感触がする。風と共に草と花の匂いが流れてくる。

「また知らない場所か・・・なんか、こんなのばっかりだな」

そう呟きながら立ち上がり、辺りを見渡す。

倒れていた場所は石が並べられて作られた道のようで、道がない場所には、白い花が生えているようだ。奥には大きな家が見え、さらにその奥には、一際目立つ大樹が見える。

そして辺りを見回すと、遠くのほうは白い霧のようなものが立ち込めており、その霧の中には何か塔のようなものが何本も建っている。そして、その景色は見渡す限り360度広がっているように見える。

「で、俺はどうしてこんなところにいるんだ?」

そこまで言い、眠る前のことを思い出す。流石に今回は思い出せた。・・・正確には、思い出せてしまった。

見知らぬ部屋で目覚めたことを。記憶を無くしたことを。獣に対しての、自分の無力さを。獣から逃げ回る恐怖を。そして、体をゆっくりと、獣に喰われていく自分を。

「うっ！・・・がはっ」

そこまで思い出してしまい、様々な感情の波に耐えきれずにその場で嘔吐してしまう。

吐いたら頭がスッキリしたので、冷静に今の状況、特におかしい点を整理してみようかと思う。

まず１つ目、どうして喰い殺されたはずの自分が、五体満足でいるのかということ。喰われた筈なのに体があるという現状の上、さらには衣服まで獣に襲われる前の綺麗な状態のようであった。

これは『死後の世界だから』と言われれば納得の一言ではある。流石に、死後の世界にいってまで喰い千切られた痕だらけというのは誰も得をしないだろうとの判断だ。

次に２つ目、吐瀉物の中に胃液以外の異物が入っていないように見えたということ。

何かしら食べていれば、それらも消化しきれていない状態で出てくる筈なのだが、それらしき物が全くなかった。ちなみに、口内が酸味で溢れかえっているので、胃液を吐いたことは間違いなさそうである。

これも『死後の世界だから』と言われれば納得の一言ではある。流石に、死ぬ前に食べていたものまではこちらの世界に持ち込めなかったのだろうという判断だ。

最後3つ目、どうして知らない場所で倒れていたかということ。喰われた先は胃袋の中で、決して白い花が咲いていたり、大きな家があったりするような場所ではない筈である。流石に馬鹿でも分かる。

やはり『死後の世界だから』と言われれば納得の一言ではある。流石に、死後の世界だとでも言われなければ説明がつかない。そもそも、このような幻想的な場所が現実世界にあるほうが不気味である。

そこまで考えて、一旦落ち着いて考え直し、出た結論はこうだった。

「なるほど、ここは死後の世界か」

至極、当然な答えであった。

「ということは、あの大きな家は・・・考えても仕方ない、とりあえず行ってみるか」

これ以上は考えるよりも行動したほうがよさそうだ、という考えに至り、彼は大きな家へと歩みだす。しかしその顔は、死という概念を叩きつけられた後だというのに、何故かすっきりとしていた。

家に向かう途中、やたら墓石のようなものがあったり、人間と同じ程の大きさの人形が打ち捨てられていたりしたが、特筆するようなことはなかった。

家の扉の前に立ち、扉を叩く。中からの反応はない。続いて声を出しながら扉を叩く。・・・中からの返事はない。本当に中に誰かいるのか不安になってくる。

しばらく様子を窺っていたが、結局家の中から人がいるような気配はなかった。上ってきた階段から下りながら、さてこれからどうしようかと考えていたとき、階段の中腹辺りからソレらが現れた。

「うわっ、あの時の白いの!?」

例の夢の中に出てきた、白いナニかが、地面から生えてくるように現れたのだ。しかも3体。

「ま、またあの時みたいに何かするつもりか・・・そうなのか!?」

言っている本人は、すごく逃げ腰である。そんな態度を見てか、白いナニか達は生えてきた地面からあるものを取り出す。

「ヒッ・・・手帳と、ペン?」
　ナニか達は、手帳とペンを取り出したかと思うと、３体が一斉にその手帳に何かを書き出したのだ。
「何やってんだ・・・あっ、書き直しだした」
　ナニか達が手帳に何かを書き出す。ちなみに手帳とペンは人間が使うものと同じサイズなので、ペンを抱えるように持ちながら何かを書いている。
　見知らぬ生物とはいえ、小さな人のようなものが、全身を使って一心不乱に何かを書いていく姿は、少し微笑ましいものがあった。そして、しばらく眺めていたところ、１体が書き終えたらしくこちらに手帳を見せてくる。
「えっと、何々?『私　は　使者　です』・・・あっ、自己紹介?」
　白いナニか、使者はそう聞かれると、コクコクと頷いて見せた。
「あっ、どうも・・・ん、そっちも書き終えたのかな」
　続いて、残りの２体もこちらに手帳を見せてきた。・・・ちょっと可愛いかも
「えっと、『ワタシ　ワ　シシャ　デス』・・・これも自己紹介かな?それで、『わたしわ　ししや　です』・・・お、おう」
　そこまで読み終えると、使者たちは一斉に手帳のページを捲った。そしてそこには、少し違う字体でこう書かれていた。

『『私たちは使者という存在です』』
「いや最初にそれ見せようよ!?」
今までの件は何だったのか。しかし、使者たちが満足げなポーズを取っているので、ちょっとやってみたかったんだろうなと考えることにした。（ちなみに表情は一切変わらない。）

そこまで考えて、とあることに気がつく。自分の名前がないのだ。
正確には、自分にもちゃんとした名前があったはずなのだが、当然そのことを忘れているため新しい名前を考えないといけないのだ。
「名前・・・う～ん」
そう呟くと、使者たちは小首をかしげ、また手帳に何かを書き始めた。何なのだろうと思いしばらく待っていると、３体が同時に手帳を開いて見せてきた。
「何何？『狩人様　は』『カリウド　サマ　トイウ』『なまえ　でわ　ないゐ　ですか』・・・連携力すごいな」
最後の使者に、字を間違えていることを指摘しようかとも思ったがやめた。今はそのようなことよりも、もっと重要なことを言われたような気がしたからだ。
「『狩人』って何だ・・・」

そこである。自分はどうしてここにいるのかも分からず、どうして病室のような場所にいたのかも分からず、挙句に記憶さえないのだ。それなのに、いきなり『狩人様』と言われて、はいそうですかとはいかない。だからと言って、記憶があった頃は狩人だったかと言われると、それを否定できる根拠も無ければ、肯定できる根拠も無い。

さてどうしたものかと熟考しようかと思った矢先、使者の1体から手帳を差し出される。

「えっ、何・・・くれるの?」

使者はその言葉に頷いた。どうやら、当たっていたようだ。そして、恐る恐るその手帳を受け取る。

「あ、ありがとう」

何故差し出されたのかはいまいち分からないが、とりあえずお礼を言う。それを聞いて満足したのか、使者たちは地面に潜るようにきえてしまった。

「手帳だし、中を読めってことなのかな・・・」

適当にページを捲っていく。ほとんどのページが白紙であったが、何か書かれたページが見え、手帳を捲る手が止まる。

「『後輩狩人へ。詳しくは次ページから』・・・なんだこれ」
明らかに違う字体でそう書かれているページがあった。元の手帳の持ち主のものだろうか。とりあえずはページを捲る。
「えっと『獣狩りの狩人としての基礎知識』・・・獣狩り？」
『狩人』といえば獣を狩るのが基本だとは思っていたのだが、このような書き方をするということは、獣以外を狩る狩人もいるということらしい。・・・他は何を狩るのかというのは考えないようにしよう。

手帳には、様々なことが書いてあった。この場所は、『狩人の夢』という場所らしい。そして、墓石のようなものに手を置き、知っている『灯り（ともり）』の場所まで転送できるらしい。さらに、死んでもこの狩人の夢に送られるだけで済むということらしい。・・・便利すぎない？
そして、狩りのコツについてまで書かれている。いろいろと書かれているが、要訳すると「ヒット・アンド・アウェイを心がけて、銃で隙を作って内蔵を抉り出そう！」ということらしい。内蔵って・・・

そこまで読み終えると、使者たちが地面から出てくる。それぞれが、斧、杖、鉈のよ

うなものを持っている。人間が使うように設計されているようで、使者たちの体にはかなり大きい。

「えっと、それが『仕掛け武器』って奴か？」

それを聞き、使者たちは頷いている。そして、使い方を教えているかのように、手に持っている仕掛け武器を振り回しだす。当然だが、体全体を使って振り回している。ちょっとかわいい。

使者たちの愛らしい姿はさておき、先ほどまで読んでいた手帳に再び目を落とす。そこには、使者たちから貰える仕掛け武器の説明まで書いてあった。

『獣狩りの斧』

斧の特性はそのままに、変形により状況適応能力を高めており

重い一撃「重打」と、リゲイン量の高さが特徴。

1体1での殴り合いから集団戦までこなせるぞっ！

とても重く、ある程度の筋力が必要になるから気をつけよう！

『ノコギリ鉈』

変形前は人ならぬ獣の皮膚を裂くノコギリとして

変形後は遠心力を利用した長柄の鉈として、それぞれ機能する。
とても軽いので、ヒットアンドアウェイをしやすいぞ！
ただし、変形前はリーチが短く、変形後は遠心力で振り回されやすいぞ！

『仕込み杖』
刃を仕込んだ硬質の杖は、そのままで十分に武器として機能するが
仕掛けにより刃は分かれ、まるで鞭のように振るうこともできる。
扱いが難しいかもしれないけど、近、中距離をこれ１本でこなせちゃう
的確に弱点を狙える技量が必要になるぞ！

「・・・どれがいいんだろう」
３本の武器について、かなり分かりやすくまとめられていた。しかも、変形前と後の挿絵つきで。この手帳を持っていた狩人は絵が上手かったようだ。・・・やけに感嘆符（ビックリマーク）が多い気がするのは気のせいだろう。
まず、斧は無いと思っている。『リゲイン』というのはどういうものかは分かっているが、つまりは「獣とノーガードで殴りあう」イメージで間違ってはいないと思う。そんなことはしたくないので無しだ。

そうなると鉈か杖なのだが、手帳の挿絵を見る限り、鉈は「変形前の、相手の懐に潜り込んでの連撃」と「変形後の、遠心力を生かしての重い一撃」が得意なようだ。
それに対し、杖は「変形前の、軽く隙の少ない連撃」と「変形後の、広範囲を攻撃できる攻撃」が得意なようだ。そこまで考えると、選択肢は2つに1つだった。

「えっと、この『仕込み杖』を貰おうかな」
正直、狩人が狩る『獣』がどういうものかを想像できない以上、無闇矢鱈(むやみやたら)に近づくことが恐ろしいのだ。死を経験してしまった以上、これ以上は経験したくないと思ってしまったのだ。結果、広範囲を攻撃できる仕込み杖を選んだのだ。
仕込み杖を受け取ると、使者たちはまた地面に潜るように消えてしまったようだ。しかし、今度はすぐに現れた。今度は、銃を2本もってきたようだった。・・・2体がそれぞれ銃を抱えているので、1体は手持ち無沙汰になっているようだ。
「それは・・・『短銃』と『散弾銃』か?」
何も持っていない使者が頷く。そして、どちらがいいですか?というようなジェスチャーをとった。そこまで見て、また手帳に目を落とす。

『獣狩りの短銃』

短銃は散弾銃に比べ素早い射撃が可能なため、迎撃などに適する。
威力は期待するほどでもないので、相手の体制を崩したり、相手の攻撃を迎撃したりする目的で使おう！

『獣狩りの散弾銃』
衝撃により獣のはやい動きに対処する部分も大きく
特に散弾を用いるこの銃は、当てやすく効果が高い。
密着していれば威力も期待でき、さらに広範囲を攻撃できるため、相手への威嚇目的でも使えるぞ！

「う～ん、これは『短銃』がいいのかな」
仕込み杖を選んだ理由を考えれば当然である。反動が大きい散弾銃でわざわざこちらが隙を作って、その間に攻撃されたりなどしたらたまったものではない。短銃のほうも外した場合は隙になるだろうけれど、そこそこの連射は利くようなので問題は無いだろう。

使者から短銃を受け取り、改めて武器の確認をする。

仕込み杖は装飾が少ない金属製の杖のような見た目をしている。だが、杖の表面をよく見ると、かなり鋭利な刃物のようになっている。これで切りつけて攻撃するのだろう。そして、持ち手の部分にスイッチのようなものが取り付けられている。これを押すことで止め具がはずれ、鞭のような姿に変わるのだろう。

短銃のほうは、多少ではあるが銀の装飾が施され、グリップは誰の手にも収まりやすいように調整が出来るよう工夫されている。性能としては中折式の単発銃で、自らの血を混ぜた水銀製の弾丸を使用する特注品のようだ。1発ごとにリロードが必要なのかと思いきや、狩人の夢で1発補充しておけば、後は勝手に手持ちの水銀弾が短銃の中に補充されるらしい。

手帳には、「血の意思の技法により、夢の中にある道具を手元に呼び寄せたり、銃のリロードの手間が無くなったり、輸血液で傷を癒したり、他にも色々とできる」らしい。『血の意思の技法』って何だ・・・。兎も角、リロードに関しては悩む必要は無いようだ。そうなると、かなり使い勝手がいいのではないだろうか。

そのようなことを考えながら、右手に杖を、左手に銃を持ち、軽く武器の使い心地を確認する。

仕込み杖のほうは、思っていた以上に軽いというのが第一印象だった。少し振ると、

風を切る音が小気味いい。しかし、やはりというか、決定的な攻撃力はあまり無いようだ。強いてあげるとすれば、杖の先端による刺突攻撃を行えば、かなりのダメージを期待できそうだということか。

次は、スイッチを押して鞭のような形状に変形させてみる。こちらもやはり軽めで、一撃の攻撃力は少な目と見て間違いはなさそうだ。それでも攻撃範囲はなかなかのもので、一般的な剣の倍以上の範囲を攻撃できるようだ。

そこまで確認して、杖の状態に変形させる。戻すときには、地面や相手などに、杖の先端での刺突攻撃を行えば、止め具が嵌って元の杖に戻るようだ。そして、そこまで確認して一言。

「これ・・・凄く使いやすいぞ」

具体的には、想像の５倍は使いやすい。それくらいには使い勝手がよいのだ。杖を振るときに力がほとんど必要ないこともそうだが、それ以上に非常に手に馴染む。作り手の技術力の高さが窺える一振りだった。

短銃のほうも試しに発砲してみようかと思ったが、水銀弾を所持していないことに気がつく。すると、使者が水銀弾を１０発だけ渡してきた。ありがたいけれど、試し撃ちだけだったので３発もあればよかったのだが・・・兎も角、水銀弾を短銃に込める。当

然、装填数は1発だ。
まずは1発目、発射時の反動はかなり少なく、狙った場所にしっかり着弾するようだった。
続いて2発目、射程はそこそこで、仕込み杖の鞭による攻撃の倍ほどまでが、有効射程範囲と見て間違いないだろう。
最後に3発目、威力を見てみたかったのだが、試しに撃てそうなものが周りには見えなかった。そこは実戦で試すことにする。家の外壁に撃ち込むという案は、流石に失礼極まりないのでやめておこう。

短銃の性能に、血の意思の技法によるリロードも確認できた。ズボンとベルトの間に短銃を差し込み、近くにあった墓石に触れる。すると頭の中に、始めに目覚めた診療所のイメージが浮かぶ。恐らくこれが『灯り(ともり)』へのだろう。
「さて・・・行くか」
そう意気込み、診療所のイメージに集中すると、狩人の意識が薄れていった。

第３話　獣狩りの夜が始まる

狩人の意識が覚醒する。そこは、見覚えのある診療室

・・・の扉を出てすぐの部屋の中。

「・・・んん？」

イメージとしては、目が覚めた診療室だったと思ったけれど・・・まあ大差ないような気もしてきたので、気にしないことにした。

そのまま部屋を出てすぐ、診療台がいくつか置かれた部屋の中央辺りに、獣奴はまだいた。相変わらず、何かを貪っているように見える。

獣が見える位置まで移動した後、夢で読んだ手帳に書いてあったことを思い出す。

「１つ、『先制攻撃、不意打ちは戦術の基本。先手に回り、戦闘を有利に進めろ。後手に回るな、常に周りに警戒しろ』だったか・・・」

本当に初心者狩人向けのことばかりが書いてあった気がするが、今では確かに役に立つ。最初は逃げることばかり考えていて、背中から攻撃を受け、そのまま・・・これ以

上思い出すのはやめよう。
ともかく、あの手帳の半分ほどは狩人としての知識や獣狩りのコツなどが網羅されていた。狩人の夢で読んでおいたが、全てが頭に入りきっているとは思っていない。次の灯りまで行ったら、夢に戻って復習をする予定だ。

そこまで再考し終えると、頬を平手で叩き、気合いを入れなおす。自然と右手に持つ杖に力が篭る。記憶が無くなってから初の獣狩りに、緊張が隠せない。
「よし、行くか！」
台の影から飛び出し、獣に向かって一気に駆け出す。
しかし、獣まで後半分というところで空の薬瓶を蹴り飛ばしてしまい、獣に気がつかれてしまった。それでも、狩人は止まらない。

「4つ、『常に平常心であれ』ッ！」
そう叫びながら獣に飛び掛り、杖を横なぎに振るう。獣は突然のことに回避が遅れ、顔面に杖の殴打を受ける。
しかし当たり所が悪かったのか、獣は体制を崩すことなくそのまま後ろに跳び、戦闘態勢に入る。こちらも杖を鞭に変形させて相手の攻撃に備える。

すぐに獣がこちらに跳びかかってくる。しかし、狩人はこれを左斜め前にステップすることで回避する。そして、すれ違いざまに鞭による攻撃を獣の右後ろ足、スネの辺りに叩き込む。

そしてそのまま反転し、獣のほうに向き直す。今度は多少は効いたようで、獣は体勢を崩していた。獣はすぐに体勢を整え直し、こちらに振り向く。

「５つ、『前に回避しろ』・・・これはいけるぞ」

例の手帳に書かれていたことをぶっつけで実行しているが、確かにこれはすごい。知識として身に着けてただけでここまで違いが見えてくる。自分１人では絶対に実行できなかった戦法、気がつけなかった戦法など。しかし、獣狩りの狩人として生きていくには『基本』となること。

あの手帳の元の持ち主は、さぞ優れた狩人であったのだろうということが、今の一瞬の攻防で窺えるほどだった。

体勢を整え直した獣との睨み合いが続き、痺れを切らした獣が再び攻撃に移る。

今度は、こちらに覆いかぶさるように、両前足を振り上げながら跳びかかってくる。こちらは待っていましたと言わんばかりに、獣の右後ろ足を狙い短銃を発砲する。

先ほど攻撃したスネの辺りに水銀弾が直撃する。やはりというか威力は大して無いように見えたが、相手の体制を崩すには十分だった。バランスを崩した獣は攻撃の勢いを殺せずに、その場で大きく態勢を崩す。

「俺の・・・仇だ!」

大きく体勢を崩した獣に対し、好機と見てステップで近づく。そしてそのまま眼球目掛けて、鞭を杖に変形させながら突き刺す。杖はそのまま眼球を突きぬけ、脳を貫く。

獣は一瞬だけ抵抗したように見えたが、ビクンと体を震わせ、そのまま事切れた。初めての獣狩りは、成功に終わった。

「はぁ・・・はぁ・・・6つ、『銃で相手の体制を崩せ』・・・これで俺も狩人初心者かな・・・ふう」

そういいながら、獣の頭から杖を引き抜く。杖は血で汚れ、肉がこびりついていたが、血振りの容量で杖を振るうと、血や肉が綺麗に振り落とされた。つくづく凄い武器だと感心する。

感心していると、自分の体内に何かが流れ込んでくるような感覚に陥る。突然のことで驚いたが、冷静に考えるとすぐに答えに辿り着けた。

「あー、これが『血の意思を得る』ってことか・・・」
　手帳に書いてあったことの１つだった。どうやら、獣を狩ると『血の意思』というものを得ることが出来るらしい。そして、この血の意思を集めると狩人の夢で様々なことが出来るらしい。
　・・・できれば具体的に書いてもらいたかった。

　そこまで考えると、とあることを思い出し周囲を見渡す。そして、目当ての物を発見する。それは血痕のように見えるが、周りに散らばった獣の血とは違い、明らかに違う、何故か強く惹かれる何かがあった。
「あった。これが、俺の落とした血の意思か」
　そう言い、血痕に手を差し伸べる。すると、自分の中に血の意思が流れ込んでくる感覚に陥る。そして、先ほどの血痕に強く引かれる気持ちは無くなった。
　狩人は夢に戻るとき、灯りを経由しない限りは血の意思を持ち込めないのだという。なので、死ぬとその場所に血の意思を全て落としてきてしまう。さらに、はやく回収しないと血の意思が劣化したり、他の獣に拾われてしまうらしい。
　詳しくは手帳に書かれていなかったのでよく分からなかったが、要するにサイフを落とす感覚らしい。自分はサイフを落とす感覚というものを覚えてはいなかったが・・・

「第一関門突破か・・・とりあえず病院を出よう」

とても苦労したように思えたが、まだ病院を出て街にすら出ていない。獣狩りはこれからが本番だと気を引き締めなおし、先を目指す。

部屋を出るとそこは玄関前広間のようで、玄関近くの棚に輸血液と水銀弾があった。誰もいないようだし、貰っていってしまうことにした。これは大収穫だとホクホク顔で玄関を開ける。気を引き締めた意味はあまりなかったようだ。

扉を開けた先はいくつかの墓石が並んでいた。恐らく、この病院で死んだ人達のものだろう。しかし、死者を哀れむ時間は無い。獣狩りを全うし、青ざめた血を手に入れる。その目的を逸早く達成するためにも先へ進む。

正面と側面に鉄製の柵扉が見える、側面のほうは内側から鍵がかけられていたようで、墓地が見える。

正面側は鍵がかけられておらず、外に街並みが見える。恐らく正面が市街と病院との境だろう。柵扉はどこか錆びているのか、かなり力を入れなければ開かなかったが、なんとか人1人分だけ空けてその隙間から外へ出る。

「・・・うわ、すっげ」

ヤーナム市街を一言で表現すると、『高低差が激しい街』だった。後から聞いた話だが、獣は梯子を登れない。それを踏まえて、梯子を利用した立体的な建造を繰り返していった結果だそうだ。

遠くに見える橋と周囲の高い建造物、そして鮮やかな夕日が美しい。橋の向こうのほうから時折聞こえる、鐘の音が街に響く。それを聞き届け、狩人は市街の探索を始める。

曲がり角の向こう側から、市民が現れた。左手に斧を持ち、右手に松明を持っている。ソフトハットを目深に被り、手や顔に包帯を巻きつけている。第一村人発見である。

「えっと、こんばんはー」

こちらから声を掛ける。何か、獣に関する情報が聞けるかもしれないと思ったのだ。しかし、市民がこちらに対してとった反応は予想外のものだった。

「失せろ、失せろっ！」

「ええっ!?」

あまり友好的ではなさそうだった。こちらに悪態をつきながら、松明を振りかざしてくる。自分は何かしたのだろうかと思いながら、杖を鞭に変形させ、短銃を正面に構える。とりあえずいつでも戦える準備はしておく。

「呪われた獣め・・・全部、貴様のせいだ！」

先に仕掛けたのは市民のほうからだった。こちらに走りよってきて、松明を振り回す。控えめにも攻撃とは言えない様なお粗末なものだったが、攻撃のつもりだったのだろうか。

こちらは1歩下がり、鞭で帽子を下から弾くように攻撃する。威嚇のつもりだったのだが、市民は回避できずに顔に一撃を受けてしまう。

顔に攻撃を受けた市民が、こちらを睨み返してくる。帽子を弾いた今、市民の顔面を直視してあることに気がつく。

「け、獣か・・・？」

人の身としては明らかに毛深すぎるのだ。さらに口元からは牙のようなものが見え隠れし、全体的に獣のような印象を受ける。それを隠すための包帯と帽子だったのだろうと、今なら理解できる。

「獣だっ・・・貴様は呪われた獣だ！」

そう叫び散らしながら市民がこちらに松明の火を向ける。その瞳に生気は無く、瞳孔が崩れ、蕩けきっているように見える。

「まさか・・・獣って、元は人間なのか?」

そう呟きながら、市民・・・もとい、『獣』に対し鞭を構えなおす。獣狩りの夜は、まだ始まったばかりだ。

第４話　２人の助言者

「失せろ、失せろおっ！」

獣になりかけている市民が斧を振り上げ、こちらに迫ってくる。しかし、その行動自体は緩慢ででたらめだ。ぎりぎりまで攻撃を引きつけ、斧の振り下ろしをステップで斜め前へと回避しつつ後ろへと回り込み、鞭を杖に変形させながら相手の背を突く。

勢いをそのまま杖に乗せた突きに市民は耐え切れず、杖はそのまま腹を貫く。

「お前の・・・せいだ・・・」

そこまで言いきり、市民が事切れる。死んだことを確認したところで、腹から杖を引き抜いて血肉を振り落とす。血の意思が体の中に流れ込んでくる感覚の中で、とあることを考える。

「同じようなことばかり・・・もしかしなくても、正気も無くなっているのか」

先ほどの獣になりかけていた市民は、同じようなことばかりわめき散らしていたからだ。そして、戦い方もどこか人間的ではないようなものだった。武器を振るうにしても、少なくとも狩人初心者の自分よりもお粗末で、行動の１つ１つが先読みしやすかっ

たのだ。

「・・・これからの方針としては、獣と獣になりかけの市民・・・『獣市民』とでも呼ぶか。それらの狩りかな」

元は人であったであろう獣市民を狩るのはどうなのだろうかと一瞬悩んだが、あの姿を見て、まだあれが人間だと言える者のほうが少ないだろう。実際、自分も言えない。あれはどうみても獣が二足歩行しているだけだ。

それに、あれからさらに獣度が増して強くなることもあるかもしれない。そう考えると、危険となりうる芽を早めに潰すという意味では正しい判断だとは思う。・・・多分。

「後で怒られたりしないかな・・・って何これ、レバー?」

そこまで考えていると、凄く気になるものを発見する。引いてくださいと言わんばかりに、市街の風景に似つかない大型のレバーが置いてある。すごく罠っぽい。

「・・・これ、罠っぽいけど引いちゃえ!」

流石にこのような場所で大爆発するようなトラップはないだろう。それだけ考えると速攻でレバーを引きに行く。少し錆びているようで硬かったが、引けないレベルではなかった。体重を掛けて踏ん張ると、レバーを引ききることができた。

すると、頭上から梯子が下りてきた。恐らく、梯子を下ろすための仕掛けだったのだろう。勝手に下ろして大丈夫なのかという不安もあったが、その時はその時。のらりくらりでもまあ大丈夫だろう。

「・・・今更だけど、もともとこういう人種でしたっていうのは無しの方向で考えるか」

そのようなことを考えていたらキリがなさそうなので、とりあえず声を掛けて、殺意を向けられたら狩る。という考えで行くことにした。悲しいことに、彼は考えることが苦手だった・・・。

頭上から下りてきた梯子を上りながら、これからの予定を考える。輸血液や血の意思の技法などの使い方はまだいまいち掴めていないし、一旦夢に戻って復習し直すか、それとも行けるところまで進んで、新しい情報が入ってから夢に「キオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ・・・」・・・

「い、今のは俺の普段使われていない上腕二頭筋が悲鳴を上げただけだから・・・決して、あんな大きな鳴き声を出せるほどの大きな獣がいるなんてことはないから絶対にないから」

上腕二頭筋は遠くの大橋から甲高い悲鳴（かんだかい鳴き声）をあげたりはしない。ちなみに狩人の体は震えていた。きっと、上腕二頭筋が悲鳴を上げたからだろう、本人が言うのだから間違

いない。

悲鳴をあげた上腕二頭筋に気を配りながら梯子を上りきったところで、丁度よく灯り(ともり)を見つけられた。見た目としては、少しの装飾が施された鉄の棒を地面に突き刺して、その棒の先端に鐘とランタンをぶら下げているような見た目をしている。思っていたよりもすごく簡素だ。

ちなみに利用するには、このランタンに火を点ければらしい。火と言っても、物理的に着火するのではなく、上の鐘を鳴らせばいいのだとか。どういう原理なのだろうか・・・

鐘を鳴らしてランタンに火を点ける。鐘の音は澄んで、それでいて普通の鐘のような高い音ではない、小気味いい音だった。言葉では言い表せないが、とにかくいい音だ。そして、灯りの点火を合図に地面から使者たちが生えてくる。・・・なんか４体に増えてる気がする。

そこで帰ろうとしたところで、すぐ目の前の家から誰かが咳き込むような音が聞こえた。話しかけたらすぐに殺意を向けられた前例があったが、それでも一応話しかけてみることにした。

「すいません、こんばんは」
「え・・・あぁ、獣狩りの方ですね」
よかった、今度は友好的な感じの住民だ。声の感じからして、３０台前後の男性のようだ。声が掠れているように聞こえるのは、きっと長い間咳き込んでいるからだろう。
「それに・・・どうやら、外からの方のようだ。・・・私はギルバート。あなたと同じ、よそ者です」
外から？つまり、自分は異国の人間なのだろうか。そこら辺は記憶が無いのだから分からないけれど。と、そこまできて、１つ問題を思い出す。自分の名前を名乗れないのだ。しかし、あまり考えていると怪しまれてしまう。
「私は・・・皆から狩人と呼ばれている者です。まあ、お好きなようにお呼びください」
うん、嘘はついていないな。職業名で自己紹介する人だって1人や2人はいてもいいだろう・・・多分。
「そうですか・・・狩人さん、色々とご苦労でしょう。この街の住人は、皆・・・陰気ですから」
陰気が一周回って殺意に変わっていたような気がしたが、きっと気のせいではないのだろう。先ほど出合った獣市民に、まだ理性があったのであればの話だが。

「私は床に伏せり、もう立つこともままなりませんが・・・それでもお役にたてることがあれば、言ってください」

そこまで言うと、ギルバートさんは咳き込んでしまう。というか、ギルバートさん滅茶苦茶いい人すぎる気が・・・

「実は、この街にとあるものを探しにきまして・・・」

とにかく今は情報が欲しかった。この街に住んでいるような人ならば、名前くらいは聞いたことがあるのではないかと思ったのだ。

「・・・この街は呪われています。あなた、事情もおありでしょうが、できるだけはやく離れた方がいい。この街で何を得ようとも、私には、それが人に良いものとは思えません・・・」

言われてみれば、確かにそうかもしれない。そもそも、『狩り』を全うするために『血』を探して手に入れろってどういうことだよ。あと、あの走り書きを書いたの誰だよ、直接教えてくれよ。

・・・などと考えていても話が進まないので、とりあえず『青ざめた血』について尋ねることにした。

「『青ざめた血』ですか？うーん・・・すみませんが、聞いたことはありません」
　さすがにギルバートさんも知らないようだ。まあ、家の中に篭っている病人が知っているようなことであれば、誰に聞いても知っていると答えが返ってくるだろう。
「けれど、それが特別な血であれば、訪ねるべきは医療教会でしょう。医療教会は、血の医療と、その特別な血の知識を独占していますからね」
　なんだか、すごく有益な情報を聞けた気がする。つまり、医療教会もしくはその近辺に行けば、特別な血についての情報がさらに集められるようだ。その中に『青ざめた血』についての直接的な情報は無いかもしれないが、それでも行く価値はありそうである。何より、血の知識を独占している辺りが怪しすぎる。好奇心が疼く。

「あー・・・ところで、その医療教会とやらには、どうやって行けばいいのでしょうか」
　医療教会に向かうことは決定したが、ルートが分からない。流石にそれだとまずいので、道も一緒に尋ねることに。
「そうですね・・・ここ、ヤーナムの市街から谷を挟んだ東側に、聖堂街と呼ばれる医療協会の街があります。そして、聖堂街の最深部には古い大聖堂があり・・・そこに、医療教会の血の源があるという・・・噂です」
　そこまで言うと、ギルバートさんは再び咳き込んでしまう。ふと思ったのだが、血の

源があるというのは、どういうことだろうか。血の医療を始めるきっかけでもあるのか、それとも特別な血そのものに関するものがあったりするのだろうか。

・・・今更だが、この街の名前は『ヤーナム』というらしい。本当に今更だが。

そのようなことを考えているうちにギルバートさんの咳が落ち着いてきたようで、再び話を始める。

「ヤーナムの街は、よそ者に何も明かしません。常であれば、あなたが近付くことも叶わないでしょうが・・・獣狩りの夜です。むしろ、好機なのかもしれませんよ・・・」

また新しい単語が聞こえた気がした。『獣狩りの夜』というのもなんぞや。まさか、先ほど倒したような４足の獣や獣市民を狩るような異常事態が毎晩のように行われているわけではあるまい。しかし、恒例行事のようなものであることには間違いなさそうだ。

「ありがとうございました、とりあえず私は聖堂街とやらを目指すことにします。お体のほう、お大事になさってください」

「ええ、探し物が見つかるよう祈っております・・・ごほっ、ごほっ、ごほっ」

ギルバートさんに挨拶を済ませた後、一旦狩人の夢に戻ることに。情報の整理と、上腕二頭筋を休ませなければいけない。そう、上腕二頭筋を・・・そう考えながら灯りに手を伸ばし、意識を狩人の夢へと集中させる。

・・・本当に狩人の夢に戻ることができてしまった。すごいな、灯り。そんなことを考えていると、とあることに気がつく。

「扉が・・・開いている?」

以前訪れたときには硬く閉ざされていた扉が開いていたのだ。家の主が帰ってきたのだろうか。ともかく、何か情報が聞けないものかと期待しながら大きな家へと向かう。

階段を上り、家の中へと入る。家の中、右の壁際には何かの作業台と巨大な箱、そして本棚とそれに入りきらなかった本が山積みになっており、左の壁際には机に再び本棚と山積みの本。さらには扉が備え付けてあり、そちらからも外に繋がっていた。そして奥には簡素な祭壇のようなものが見える。必要最低限の生活設備が1つも見当たらないが、大丈夫なのだろうか。

などと考えていると、家主らしき人物を発見する。車椅子に座った男性のようで、手

には杖を持っている。足が不自由なのかと思いよく見ると、右足が簡素な義足のようだ。山の部分が潰れたポーラーハットを被っており、さらに俯いているので顔がよく見えないが、手甲の皺と帽子からはみ出た白髪から、かなりのご老体のようだ。

「やあ、君が新しい狩人かね」

余計なことを考えていたら、先に挨拶されてしまった。うぅむ、これは不覚。

「どうも・・・えっと、名前不詳の狩人です」

「面白い自己紹介だね、気に入ったよ。ようこそ、狩人の夢に。ただ一時(いっとき)とて、ここが君の『家』になる」

自己紹介は失敗してしまったようだ。やはり、今からでも新しく名前を考えるべきか。

「私は・・・・・・ゲールマン。君たち狩人の、助言者だ」

このご老体・・・ゲールマンの名前を聞いたとき、自分の体の中に違和感が生まれたことに気がついた。何故だかは知らない、どうしてだか分からない。だが確かに、はっきりと感じたのだ。

記憶を失ったはずの自身の体の奥底で、血が騒ぎ、滾った感覚を

第5話　学習と目標

ゲールマンさんの話をまとめると、とりあえず獣を狩っていればいい。ここは狩人の工房でもある。ここにあるものは何でも自由に使っていい。とのことだった。・・・人形も使っていいと言われたが、性処理にでも使うのか。それとも、まさか人形遊びをするわけではないだろうし。

ちなみに現在は、その人形の横に座って手帳を読み直している。人形について、何か書かれているかもしれないかと思ったのだが、それといったことは特になさそうであった。

「しかし、こうして見るとなかなか美形だな・・・すっげぇ肌白いし球体関節だけど」

最初はうち捨てられていたかのように思えたのだが、改めて見直すと埃を被っている様な事は無く、細部まで綺麗に手入れがされていたようだ。どうして外に放り出されているのかはよく分からないが。

そのようなことを考えていると、使者たちが出てくる。今回は、メモの切れ端のようなものを持ってきたようだ。

「何それ、俺に？」
　そう訊ねると、使者たちは頷く。それを確認し、使者たちからメモの切れ端を受け取る。メモには、こう書かれていた。

『忌々しい悪夢に囚われ、だが逃れたければ
　獣の病蔓延の原因を潰せ。さもなくば、夜はずっと明けない』

「・・・えっとつまり、今までのことをまとめるとこういうことか？」
『狩りを全うする』ことや『悪夢から逃れる』ために『獣を狩り続け』、『青ざめた血』を手に入れることが出来れば『獣の病蔓延の原因をぶっ潰せる』かもしれない。そうしなければ、『夜は明けない』。
「なるほど、分からん」
　ちんぷんかんぷんだった。しかもどこか、何かが間違っている気もする。考えるのはどうしても苦手だ・・・。メモの切れ端に書かれていた一文を手帳に書き込む。そして、再び手帳の読み直しの作業に戻った。
「お、あったあった。『輸血液とリゲインについて』。」

『輸血液とリゲインについて

・狩人とはいえ、『血』と『生きようとする意思』がなければ死んでしまうぞ！

・輸血液は医療教会がヤーナム市民相手にゴミのようにばら撒いているから、そこらじゅうで拾えるぞ！

・輸血液を取り込むことで、血と生きようとする意思を得られるぞ！取り込み方は、体内に入ればどんな方法でもいいぞ！

・リゲインとは、相手の攻撃で失ってしまった血と生きようとする意思を、相手の血を浴びることで補うことを言うんだ！

・リゲインも万能じゃない。じわじわと意思を削られるようなことがあれば、意思は完全には回復しきれないぞ！

・輸血液とリゲインを上手く使いこなして、れっつ獣狩り♪』

「・・・なんか、この手帳ってすごいコミカルな感じにまとめられているよな」

ちなみに、端のほうに顔文字や挿絵なども描かれている。字体が性別を判断しづらい雰囲気なのもあって、個人的に軽くホラーだった。それでも、分かりやすくまとめられているとは思うが・・・

　そのようなことを考えながら、病院で拾った輸血液と思わしきものを血の意思の技法で取り出す。今はイメージしやすいためポケットからしか取り出せないが、いつかはどこからでも取り出せるようになれるだろうか。
「輸血液は・・・瓶に入れられてるし、飲めばいいのか?それとも、普通に注射とかで直接入れるのか・・・」
　輸血液の入った瓶は手のひらの中に納まるほどの小さなもので、コルクの栓をされている。見る限りでは飲む以外に輸血する方法がなさそうなのだが、流石にその方法はどうかとも思う。
「手帳には、『体内に入ればどんな方法でもいい』って書いてあるけど・・・どうすればいいんだよ」
　詳しい使い方は分からないままだったが、とりあえずは飲んで使うことにした。実戦で使ってみて、使いにくかったり効果が微妙だった場合は、そのときに考えればいいだろうとの判断だ。悲しいことに、考えることは苦手だった・・・

　続いてリゲインについてだったが、『血』は分かるのだが『生きようとする意思』を補うというのはどういうことだろうか。まさか、血の意思を落とすのと同様に、精神力のようなものも失ったりするのだろうか。ともかく、この辺りも実戦で試してみるしかな

い。・・・不安だ。

今更だが、獣狩りの斧がリゲイン量が多いのに対して、仕込み杖はリゲイン量が少ないらしい。確かに、攻撃を当てた際の相手の出血量は比べ物にならないだろうが、そもそもそんなに血を浴びるようなことはしたくない。内蔵攻撃もしたくない。できれば輸血液も飲みたくはない・・・

「はぁ・・・やるしかないか」

まずは輸血液の飲用、続いてリゲイン、最後には内蔵攻撃まで慣れていくしかないのだろうと諦める。しかし、そこでとあることに気がつく。

「なんだか、俺の適応力が高すぎるような・・・」

記憶を無くしたことに慌てもしたが、比較的すぐに受け入れられた。

喰い殺された時には流石に嘔吐したが、発狂したりするようなことはなかった。

武器の扱いにも、血の意思の技法にも、素人ながらもできるようになるまでに時間はかからなかった。

４足の獣や獣市民を殺したときも、罪悪感などの感情はほとんど生まれなかった。

今の輸血液やリゲインについても、慣れてしまおうと思っている。

そう、様々なことに慣れる事が早すぎるのだ。流石に異常だということは自分でも理

解できた。

「なんだろう、以前も似たようなことをしていたとかなのか？いや、それにしてもこれは流石に・・・」

記憶が無くなったとはいえ、体が覚えていると言うこともあり得るだろう。しかし、それでも死んだことや血の意思の技法については説明がつかない。

「まぁいいや。ひとまず、ヤーナム市街に戻ろうっと」

そう言い、手帳に『自分の過去の記憶も取り戻したい』と、一筆（いっぴつ）してから立ち上がる。考えるよりも行動したほうがよさそうだと判断したためだ。・・・なんか、こんなのばっかりな気がする。

意識が覚醒すると、そこはヤーナム市街のギルバート宅前の灯り。ちゃんと転送されたことを確認するために辺りを見渡す。後ろには上ってきた梯子、正面にはギルバート宅。向かって左側には裏から施錠された鉄格子の扉。右側には先へと進めそうな道がある。

転送が成功したことを確認し、杖と銃を握りなおす。獣狩りの夜は、まだ始まったばかりだ・・・

「あああああああああ助けてええええええええ!!」
「失せろ、失せろ！」
「お前の脳みそを○○○○してやる！」
「この呪われた獣めぇ！」
どうも、狩人です。現在、獣市民・・・もとい、獣の群衆に追いかけられています。何故こうなったのかと言うと、ギルバート宅から少し進んだ場所にいた市民と思わしき人に話しかけたところ、「獣がいたぞ！」みたいな感じで叫ばれて、仲間を呼ばれました。何故だ。

「あっあっあっ、あんなところにキャンプファイアーをしている猟友会の皆様が・・・」
走ったり転げまわったりしながら獣の群衆から逃げているうちに、正面の大広間にて大型の獣を焼いていると思われる人達がいることに気がつく。
「獣だ！」
「呪われた獣だ！」
「ああああああああああああ!!」

獣の群衆が増えました。前から後ろから大量の群衆が押し寄せてくる、流石にこの状況はまずい。どこかに退避できないかと左右を確認すると、左側に大広間を抜けられそうな上り階段を見つける。そして、全速力で階段へと走る。

階段を上りきったところで後ろを振り返る。獣の群衆はすぐ後ろ、階段手前にまで迫ってきている、急いで杖を鞭へと変形させ・・・

「って、あの数相手に戦って勝てるわけないだろ！」

そう叫び、また振り返って全速力で逃げる。ちなみに群衆の数は、先ほどの大広間にいた数も合わさりざっと見て十数人はいる。あそこまで数が揃ってしまっては流石にどうしようもない。

そんなことを考えると、背後から殺気を感じた。咄嗟に身をよじると、横っ腹を銃弾が掠める。

「危ねぇ！畜生、後で覚えとけよ！」

そのようなことを叫び名がら階段を下り、噴水のある広間へと入る。そこには獣の群衆はおらず、さらに辺りを見渡しやすく逃げやすい。体勢を立て直すには丁度よい場所だった。

噴水の近くまで行ったところで、数を相手にする場合は極力避け、どうしようもない場合はチャンスができるまで逃げ回ればいいのだ。と、手帳に書いてあったことを思い

出す。流石にあの数はどうしようもないだろうが、確かに複数人を相手にするのはやめたほうがよさそうだ・・・

「はぁ、はぁ、はぁ・・・って、あいつら追ってこねぇな」

広間の中央辺りで群衆が来るのを待っていたのだが、誰1人としてこなかった。息を整えながらも周囲を警戒していたのだが、門の扉を叩いている頭のおかしい大男が少し離れた場所にいるだけで、他には特筆するようなことはなかった。

「相手にされていないのか、諦めてもらえたのか・・・まぁいいか。」

そのようなことを呟き鞭を杖に変形させる。範囲で攻めるには鞭のほうがよいが、咄嗟の攻撃や1体1での戦いであれば杖のほうがよいと学習したのだ。ほんの少し前に。

しかしそれが裏目に出たのか、変形させたときの音で扉を叩いていた大男が気づいてこちらを振り返ってしまった。

「・・・あら、ばれちゃいました?」

大男の体長は2ｍほどだが横幅も広く、体格的にはゴリラのような大男が布と包帯を巻きつけただけにしか見えない。右手には人間の頭ほどの大きさの岩のようなものを持っており、獣っぽさは見えないが先ほどの行いを見る限りでは知性はほぼ無いに等しいだろう。

「えっと・・・こんばんは。いい夜でｓ「ウワァァァァァァァァ！」でっしょうねぇ！」
挨拶を試みたところ、大男が大声を上げながらこちらに襲い掛かってきた。まともな人間はほとんどいないのだろうか。
余計なことを考えていた間に大男が攻撃を仕掛けてくる。右手に持った岩で殴りかかってくるが、動きは単純で見極めやすい。ステップで懐へもぐりこみ、杖で横腹を殴る。しかし攻撃が浅かったのか感覚がないのか、あまり効いたような様子は見えない。
「でかくて硬いバカって感じか・・・簡単に体勢を崩せそうかな」
ステップで相手の後ろ側へと回りこみながら対策を考える。動きが単純で力任せな動きしかできないのであれば、体勢を崩してからの攻撃が有効ではあるのだろう。そう考えると短銃を構え、相手の次の攻撃に備える。
「ウオオオオオオオオオオ！」
再び大男が攻撃を仕掛けてくる。知性の欠片もないような、真正面からのショルダータックル。それに対しこちらは、バックステップをしながら水銀弾を大男の足へと撃つ。足に水銀弾が直撃した大男はバランスを崩し、そのままの勢いで派手に転倒し、うつ伏せのような状態になった。

「もらった！」
転倒したことを確認したらステップで近付き、大男の喉下へ杖を突き刺す。多少の抵抗はあったが、大男はすぐに事切れ、自分の体の中に血の意思が流れ込んでくる。
「ふぅ。なんか、思ったよりも個々の戦闘力は高くないのかもな・・・」
ふと、そんなことを考える。確かに獣の群衆は数こそ多いが、4足の今の大男を含め、まだ人の形を保っている獣であれば、行動を読みやすいでたらめな攻撃ばかり仕掛けてくるようなのだ。なので、最悪でも2人までなら同時に相手に出来そうな気がしてきた。

そんなことを考えていると、血の意思ほどではないが、惹かれる何かがあることに気がつく。それは、先ほどの大男が叩いていた扉の近くに落ちている人間の死体からきているようだ。
「この感じ、血の意思ではないよな・・・何だ？」
すごく気になるので、何かを探すべく死体に近付く。死体は服装的に市民のもののようであったが、死んでからかなり時間がたっているようで、ところどころが腐敗しだしていた。

「死体独特の臭いが・・・この感じは、この鞄からか？」
　近付くと原因はすぐに分かった。死体が腰につけていた鞄に惹かれていたようだ。何か中に入っているのかもしれないので、鞄を外して噴水の辺りまで移動する。流石にあの臭いの中で物色なんてしたくなかった。
「死体の冒涜とか、そういうのにはならないだろうか・・・悪く思わないでくれよ」
　そんなことを呟きながら噴水に腰掛け、鞄の中身を確認していく。

「さて、鞄の中は・・・何これ、壷？」
　手のひらに収まるか収まらないかくらいの小さな壷が出てきた。中には水のようなものが入っているようで、しっかりと蓋がされていた。用途は分からないが、詳しい確認はまた後ほどにすることにした。
「続いて・・・火薬瓶？が３本ほど」
　こちらはある程度分かりやすかった。ガラス製のワインボトルのようなものに布で栓がしてあり、その布が少し長めに外に出ていた。恐らくは火炎瓶のようなものだろう、布に着火して投てきするタイプに違いない。
「他には・・・お、地図かな？これ」
　鞄の内ポケットから一枚の紙切れを発見する。紙切れを開くと、内容はこの街全体の

ある程度の地図のようだった。聖堂街へ行くには大橋を渡ればすぐのようで、その大橋もここからかなり近いようだ。

「後は・・・赤い結晶?」

何やら赤い結晶のようなものがいくつか出てきた。見た目はスティック状で、長さと太さは手の小指ほどの大きさだ。何でできているかも分からないが、この鞄の中で一番強く惹かれるのはこの結晶のようなものだった。

「う～ん・・・とりあえず今は分からないし、一旦全部しまうか」

詳しいことは狩人の夢に戻ってからでもよさそうだったので、血の意思の技法で鞄を収納する。流石にポケットには入らなかったので、胸に押し付けながら体の中に取り込むようなイメージをしながら収納した。一体どういう原理なのだろうか・・・

「さて、また先に進むか」

その場で立ち上がり、気合いを入れなおす。色々あったように思えるが、まだヤーナム市街を抜けてすらいない。正面奥に大橋に繋がると思われる階段が見えるが、聖堂街へ辿り着くまで油断はできない。より一層警戒し、先へと進む。

「あああああああああ助けてええええええええ!!」
「失せろ、失せろ！」
「ばう、ばうばうばう！」
「グルルルァ！」
「この病気持ちのネズミめ！」
　どうも、狩人です。現在、獣市民・・・もとい、獣の群衆と犬に追いかけられています。何故だ・・・